



着地型観光ビジネス研究会【提言】

報告者 座長 / 吉田副代表幹事

滋賀県は、琵琶湖を中心とした自然・文化・歴史・食など他府県に劣らない地域資源を保有し、平成23年は日帰り4,400万人、宿泊320万人述べ4,720万人の観光客が訪れ、外国人の観光客数も震災の影響で前年比3割減少したものの12万人でありました。(県庁ホームページより) これは、観光客数・観光消費額で奈良県を上回っています。

今後より一層地域資源を活かし、観光客を増加させ、地域経済の発展に結びつけるかを、「着地型観光」の視点から研究しました。

まず、観光を取り巻く社会情勢は近年大きく変化してきました。その1つは、観光客のニーズの多様化です。団体から個人へ、旅行のテーマを持ってゆっくと、そして体験・学習・交流志向になってきています。背景には団塊世代の退職や元気な高齢化社会の到来があげられます。しがぎん経済文化センターのシニア消費アンケート(2月22日)によりますと、今後お金や時間をかけたい趣味や楽しみはという問いかけに、旅行・行楽が43.1%と第1位でありました。また、2つ目にはインターネットの普及です。エージェントの情報優位性が崩壊し、個人で旅行を選ぶ時代となってきました。そういう中で「着地型観光」が注目されています。

「着地型観光」には、エコツーリズム(自然環境の体験)、グリーンツーリズム(農山漁村での滞在と体験)、ヘルスツーリズム(自然豊かな地域での健康回復)、ちなみに日本観光開発(株)天草プリンスホテルは、第4回ヘルスツーリズム奨励賞を受賞(2012年10月)されています。他に医療ツーリズム(治療や健診を受け観光も楽しむ)、産業観光(工場見学)、文化観光(知的欲求を満たす観光)などがあります。市場規模は、330億円(国内旅行の0.15%)、参加人数259万人、平均単価12,800円(国内宿泊旅行:43,503円)ですが、リピーター率は52.9%と高いのが特徴です。

「着地型観光」の意義は、地域資源の発掘を通じての地域への愛着心や誇りを高め、着地型観光を通じ地域の再生や活性化につながる場所にあり、まさに「住民参加の観光まちづくり」といえます。

しかし、現状課題も多くあります。課題の克服が着地型観光ビジネスの成功と地域活性化につながるものであり、下記の通り提言いたします。

提言

1. 観光客受け入れ体制

- ・ 地元の理解 自主的な「観光まちづくり」の理念の確立
- ・ 地域資源の発掘 地域住民が自らの手で地域の魅力を発信
- ・ 地域連携 地域住民、行政(県市町・びわこビジターズビューロー)、商工団体・観光協会
- ・ 人材育成 ガイド・語り部、コーディネーター
- ・ 施設の整備
- ・ 関連業態との連携…地域産業の活性化
旅行業、宿泊業、運送業、飲食業、おみやげ販売などの小売業、農林水産業、製造業など
- ・ 景観の保全
- ・ 交通インフラの整備

2. プラットホーム

受け入れ側と旅行者をつなぐワンストップ窓口の設置、(地元)旅行者との協働

3. 情報発信

滋賀県の「ブランド力」…全国36位
滋賀県民の地元 愛着度…全国10位
(日経リサーチ「地域ブランド戦略サーベイ」2010年度調査)

現在の情報発信

テーマのある旅として情報発信

「神仏います近江」「湖国百景フォト紀行」「近江の城50選」「白州正子の愛した近江」「SHIGA cafe&sweets」「びワイチ」 びワイチツアーの認定、フェイスブックの対応

着地型観光は地域活性化の起爆剤になります。ビジネスとして成立させるためには行政を含め地元や関係業界が連携し、一体となり取り組む必要があります。まずは、滋賀県に来ていただくことが重要です。現在の集客力のある優れた観光地をネットワークで結び、長期滞在していただける魅力ある滋賀県にするため、上記項目の課題解決に向けた対応をお願いしたい。